

「爺さん、オレだよ」

「オレだけぢや解んねー」

「俺はなア、公津村の……」

と言つて周囲に注意しながら、

「宗吾だッ」

「ナニ、宗吾様だッ」

中なる人は、跳ね起きたらしく、
やがて忙しく雨戸を開けた、光線
は戸外に流れて、外なる旅人の影
を真白い雪の上に濃く印する。

「オー、お名主様、ようまあ御無
事で、だが嗚、今朝から夕にか
け、貴方様のお噂は、街道かけ

て専ら、わけても小前の百姓共

は、寄ると障ると、ドゾ御無

事で江戸へ御座る様に神々様へ

御願ひ申して居る始末、その御

利益か、誰が云ふとなく宗吾様

は、昨日の晩既に本街道の渡船

を越へられ、江戸の方へ行かれ

たこの噂、それに連れて役人共

も、當地に迎もマゴ付いては居

まいと、夕暮れまで此渡船場に

固めも付いたが、今は皆速歩で

本道筋から四方へ追手が懸りま

した、それに貴方様は、ようま

あ御無事で御座りました」

渡し守甚兵衛が眼には、早や、神

に感謝の涙が宿る。

「ウーム、爺さん、委細の話は

船の中で、もするとして、斯う

云ふうちにも、心が急ぐ、サア

少しも早ふ渡して呉れ」

「ホニ、之れも老人の愚痴と云

ふもの、サアお乗りなされま

せ」

宗吾と甚兵衛とが雪の中を連れだ

ちて、渡船の方へ歩み寄るとき、

小屋の後方に積んだ薬束が、俄に

ムク／＼と動き出したかと、思ふ

と、黒い者が脱兎の如く飛び出し

て宗吾に飛びかかり其腕を捕へて

罵つた。

「ヤイ宗吾、奴は馬鹿に骨を折ら

せやがつた、もう此の奴と結名

のつた、目明しの喜右衛門様

がお捕り押へになつたからには

金輪際、離すことぢやねエ」

と誇り顔に言つて、持つたる十手

を腕に挿し、捕縄を取り出して宗

吾の手首にかけながら語を續け

た、

「昨日の朝、手前が逃げたと聞い

たとき、こりやテツキリ江戸へ

と心付いたが、イヤまで此奴ア

ヒヨットすると燈臺下暗しの計

略で、追手を江戸へ出し抜いた

後、ユツクリ上ろう考へて見た

此俺の目は確に高けへ、夕から

草靴齒にセ、ラレて、此袷束へ

忍んだ効に、うまく羅つた大椋

鳥、之れで寝美は五十兩、おま

けに今後此鼻も高けへ譯」

と獨で饒舌ながら嬉し相に繩をか

けはじめ、彼は佐倉代官支配下

の十手を預かる捕手は表面、裏

面は一種の無頼漢、常に弱きを虐

げ、權威者に阿付するのを能とす

る一種の狗であつた。

一時不意の事に驚いた宗吾も落付

くと共に言つた。

「そうまで苦勞して追かけられた

からには仕方がない、喜右衛門

どの、宗吾は逃げも隠れもせぬ

だが喜右衛門どの、お前も近頃

の領内の百姓が苦しみは、人一

倍知つてゐあらう、お殿様の御

政治向き、御批判するは恐れ多